

情動的同一性について

— スターンの発達論についての哲学的考察 —

荒谷大輔*

要約

本論では、乳幼児の認識構造の発達過程について、哲学的に考察することを目的とする。言語獲得以前の乳幼児の認識は、メルロ＝ポンティなどの身体論において重要視されるものでありながら、まさに「言語」によるコミュニケーションの外側にある事柄であることから、分節化された記述があまりなされていない。本論では、スターンの議論に依拠しつつ、それを哲学的に検討することで、乳幼児の認識のあり方を照射する。

キーワード：情動的同一性、発達論、身体現象学

はじめに

本論は、乳幼児の発達をめぐるスターンの議論について、その哲学的な構造を取り出すことを目的とする。乳幼児の発達論の分野での実験の成果を取り入れつつ、幼児の意識構造の成立について踏み込んだ考察をなしているスターンの『乳児の対人関係』の所論を、そこで用いられる分析概念およびその認識論的構造の歴史的な基底を明らかにしつつ考察することで、乳幼児の認識構造と主体化の過程について検討していきたい。とりわけ、「情動的同一性」と呼ばれる乳幼児特有の対象同定の構造について、その認識論的な価値を示すことが問題となる。言語獲得以前の乳幼児の認識については、例えば、メルロ＝ポンティなど哲学的な立場からの分析があるが^①、発表当時に全盛であったゲシュタルト心理学の実験などをもとに展開される認識の構造の分析には、今日的な観点から見て一定の限界があるように思われる。とりわ

け、乳幼児の認識の特異性について言及しながら、それを「前言語的交通」と一括してそれ以上の分析が加えられていないなど、哲学的な観点から見ても、さらなる分節化の余地が残されているといえるだろう。本論では、身体論へと接続するメルロ＝ポンティの議論において重要な位置を与えられる乳幼児の言語獲得以前の認識について、スターンが示す実験結果をもとに立ち入った検討を加えることになる。

一、言語獲得以前の認識について

生後2ヶ月：流れゆく意識

生後2ヶ月までの新生児は、外界の世界の経験と自らの情動的な体験を区別することができず、外界に存在しているものを「同一」なものと認識する図式を少しずつ構築していくといわれる。赤ん坊にとって、次々と体験される経験は、まずは何の秩序もなく、単にとりとめもなく流れていくものとして現れると考えられるのである。

そのような状態にある乳児は、それゆえ、「自己」という意識についても、流れ去る経験の中か

2011年11月28日受付

* 江戸川大学 人間心理学科准教授 哲学

ら紡ぎ出すことができずに臆気なものとしていると考える必要があることになるだろう。「連合」という概念のもとに発達理論の哲学的な基礎を与えたデイヴィッド・ヒュームによれば、われわれが通常「自己」と見なしているものは、実際には、「把握できないほどの速さで次々に継起し、常に流転と運動を繰り返すような知覚の束、ないし集合であるにすぎない」[Hume, 1.4.6]とされた。われわれが「自己」と見なされているものは、実際には流転する知覚の束にすぎない。こうしたヒュームの経験の捉え方は、「自己」を確立していない幼児の意識のあり方を考える際の重要な概念的な規定を与えることになったのである。

とりとめもなく流れていく世界の全体的な体験の中で、乳児は、ある体験と別の体験との間に不変の要素を探し、彼を取り巻く不安定な状況の中に、経験の核となる「不変要素の島」を構築しようとするようになる。生まれ落ちた世界が差し出す膨大で無秩序な経験の海の中で、乳児は、そこに生きるための縁となるような経験の秩序を探りはじめるのである。

だが、そのような経験の流れの中で乳児が認める「同一なもの」は、言語を獲得した後のわれわれが認識する「同一性」とは異なるとスターンはいう。スターンによれば、生まれたばかりの乳児が最初に認める「同一なもの」の単位は、視覚や触覚、聴覚など、それぞれの感覚器官からの情報にしたがって構築されるものではなく、それらがひとまとまりになった、「無様式の知覚 (amodal perception)」と呼ばれるものになっているといわれるのである。一定の思考の枠組みによって視覚、触覚、聴覚などを分節化し、外界から「自己」に与えられる情報を秩序立てて分類する、通常の捉え方では、あるものが「同一」であることもまた、視覚的同一性や聴覚的同一性などに分けて認識されることだろう。異なるものであっても視覚的な要素だけとれば同一であったり、聴覚的な要素においてだけ同一だったりすることはありうる。対象の知覚は、このように、感覚器官ごとの同一性に分かれて認識されると考えられるのである。だが、乳児の同一性の知覚は、そのような枠組み

に当て嵌めて理解できるものではないといわれる。スターンが引く以下の実験は、そうした乳幼児の認識を考える上で重要である。

生後3週目の乳児に目隠しをし、丸い形の乳首のついたおしゃぶりと、表面にこぶのついたおしゃぶりを用意して、どちらかをしゃぶらせる。その後目隠しをとってこれを見せると、乳児は、しゃぶったばかりの方の乳首を赤ん坊は長く見つめるという [cf. Stern, 57]。言語を用いることができず、コミュニケーションもまだ確立していない幼児の意図をどのように確認するかという方法上の問題は、なお精度を上げる必要があると思われるが、ともあれ、偶然とはいいがたい頻度でしゃぶったばかりのおしゃぶりを見つめるという事態は、口の中の触覚的な感覚によってのみ認識した同一性を、幼児が目で見ただけでの視覚的な対象に適用し、それを「同じもの」と見なしていることを示唆する。ここで幼児は、目で見えていないものを触覚的な感覚に基づく同一性によって「同定」していることになるのだ。こうした結果が、未分化な体験の流れの中で乳児がどのような方式で同一性を獲得しているかを探求する発達論者たちを驚かしたことは想像に難くない。なにしろ、「〔幼児発達論の権威として知られる〕ピアジェ学派の説明にしたがえば、乳児においては、まず、乳首がどんな感触かという図式 (触覚図式) と、それがどんなふうに見えるのかという図式 (視覚図式) が別々に形作られ、ついで、これらの2つの図式の間は何らかの交流、あるいは相互作用 (相補的同化) が起こり、……はじめて乳児はこの課題を遂行することができる」[Stern, 57] はずだからである。視覚的情報に基づいた同一性と触覚的情報に基づいた同一性は、それぞれ別々に構成され、それらが「連合」によって結びつくというのが、ピアジェ学派の連合理論の基本的な考え方だったのだ。だが、この実験によって、「乳児は実際にはこのような構成過程を踏む必要がないことが明らかになった」[Stern, 57-8] のである。

乳児は、もちろん、ここで何らかの超自然的な作用によって、触覚的な感触を視覚的な情報と結

びつけているわけではない。ここでは、むしろ、われわれが視覚と触覚を当たり前のように分けて考えること自体が問題とされていると考える必要がある。実際、乳児は、触覚的な情報によって「ざらついている」とか「なめらかだ」といったような、ある種の情動性を伴った総合的なパターンの同一性を形作っているのであり、目隠しをとった後に、同様のパターンを視覚的な情報に適用していると考えられるのだ [cf. Stern, 62f.]。乳児は、口の中でおしゃぶりに触れた経験から、単なる触覚に限定されない「ざらついた／なめらかだ」という情動的な同一性を感得しており、その後、目でみた経験のうちにも、その「同一性」を見出す。視覚と聴覚の分類を前提とする限りにおいて、奇異なものを見なされる乳児の知覚は、しかし、こうした感覚の分類を飛び越え、ある「無様式的な知覚」における同一性を認めていると考えられるのである。新生児にとっての「世界」は、このような、「無様式知覚」と呼ばれる情動的なパターンの同一性によって構築されているのだ。

感覚器官の生理的な機能の違いに基づいた諸感覚の情報さえも、無様式的なかたちで「総合的」に理解されているのだとすれば、乳児にとっての「世界」の様々な対象は、われわれが設定している「カテゴリー」の適用を逃れ、非常に特異なかたちで理解されていることになるだろう。「情動的なパターン」として認識される乳児の世界は、言語的分類による「同一性」の枠組みではかこのできないものになっていると考えられるのである。われわれは通常、共通の言語を用いて世界を表象することで、自分が見ている「世界」と、他人が見ている「世界」との一致を確保する。そこにあるものを「椅子」という共通の言葉で言い表すことで、そのものを「椅子」として他者と共有することができるのである。他者との間に共通の「世界」を認め、そこにおいて互いに遣り取りするためには、共通の言語によって同じように世界を表象する必要がある。ひとつのシステムとして体系的に世界を表象する枠組みの中に他者と共に身をおくことで、乳児は、他者との間で様々な物事を遣り取りすることができるようになるので

ある。

だが、乳幼児は、そうした言語による世界の一般的な表象とは異なる仕方世界を認識するだけでなく、そうした情動的なパターンに基づいた世界の認識をある種の仕方他者と共有することもできる。「情動調律」と呼ばれるパターンのカップリングを行うことで、乳幼児は情動的パターンに彩られた世界の認識を他者と共有することになるのである。

生後7～9ヶ月：情動調律による他者の志向性の読み取り

生後7～9ヶ月頃になると乳児は、外界に存在する対象が、ある種の意図をもち、世界の構造を乳児に指し示すものであることを理解するようになるといわれる。いわゆる「指さし」を理解できるのがこの時期で、乳児は、他者の視線の先を追い、それが指し示すものを認識するようになるのである。それ以前の時期においても、もちろん、養育者とのコミュニケーションは、子どもが世界を認識するための重要な要素として機能していた。赤ん坊に対するときわれわれがとる大仰な身振りや「赤ちゃん言葉」などは、不確定な感覚の海の中で赤ん坊が不変的要素を際立たせ、情動的に同一な対象を認識するための重要な手がかりとなっていた [cf. Stern, 86]。言葉を介した意味の伝達よりも、独特なイントネーションやリズムによって不変的要素を際立たせるこの種のコミュニケーションは、乳児が世界を認識するための不可欠の要素となっていたのである。

しかし、この時期に特徴的なことは、養育者が差し出す指を、それ自身、ひとつの対象として認識するというを超えて、それによって示される他者の意図を辿り、他者が指し示すものを理解するという点にある [cf. Stern, 151f.]⁽²⁾。生後7～9ヶ月という時期においてはじめて、こうした、他者の志向性を読み取ることが可能となるのである。他者の意図を理解するという、乳児のある意味、劇的な変化は、スターンがいうように、「情動調律 (affect attunement)」と呼ばれるコミュニケーションと密接に関わると考えられる。

他者との間で、ある種の情動性の共有がなされることで、他者の意図を読みとることの下地が形成されると考えられるのだ。

- ・生後8ヶ月半になる男の子が、もうちょっとで届きそうなところにあるおもちゃに向かって、手を伸ばす。……体を傾かせながら、腕や指を思いっきり伸ばすが、それでもまだおもちゃには届かない。そこでその子は残りの数インチを絞り出そうと体を伸ばす。その時母親が、力を込めて体から空気を吐き出すように、「ウー、ウー」と次第に強くなるような調子で声をかける。このとき、次第に強まる母親の声と呼吸の効果が、乳児の徐々に強まる身体的効果と一致している。

[中略]

- ・生後9ヶ月の男の子が、母親と向かい合って座っている。手にはガラガラを握り、楽しそうに、ふざけながらそれを振り回す。それを見ながら母親は、息子の腕の動きに合わせうなずきはじめる。[Stern, 164-5]

こうした例に見て取れるのは、幼児の動きと同調し、その動きと情動的に類似した働きかけを、幼児に対して母親がなしているということである。幼児は、自分の動きと情動的に類似した価値をもつ働きかけを母親に見るとき、自分の動きの感覚とその情動的な価値が、母親との間に共有可能であることを理解する。時間とリズムを同期させつつ、他者との間にこうした情動的同一性の一致が果たされることで、自分とは異なる場所を起点として、他者と情動的に同一な世界が共有される感覚を得ることになるのである。「ウー、ウー」と声を出したり、うなずいたりすることは、乳児が為している行為の直接的な模倣ではない。だが、そこに情動的に類似した価値を認めることで、母親が同調的な「意図」を持ちうることで認識されるのだ。このようなかたちで他者との間に情動的同一性の共有がなされるならば、幼児は、他者が指し示すものを、新たな認識の対象としてみとめることができるようになるだろう。こうして幼児

は、他者が指し示すものを範として、自らの情動的世界における認識の対象を構造化していくことができるようになる。

例えば、生後1年の乳児が、それまでの経験からは、的確な行為が判断できないような、不確実な状況におかれたとする。興味をそそられたおもちゃに誘い出されて動きだしたものの、それをとるために「見かけ上の断崖（彼の認識のうちでは落ち込むように表象される空間）」を横切らなければならぬ場合、あるいは乳児がそれまで見慣れない奇妙な対象に出会った場合など、それが乳児が認識する世界において、どのような価値を持ちうるのか不確実なものに出会ったとする。「乳児がこのような状況に遭遇し、その不確実さに気づくと、彼らは母親の方を見て、彼女の顔に現れている情動の内容を読みとろうとします。言ってみれば、自分は今どう感じるべきかを知り、自分の不確実さを解決する助けとして相手の評価を得ようとするのです。もしここであらかじめの指示通り、母親が笑いによって喜びを顔に表せば、乳児はこの視覚的断崖を横切っていきます。一方、あらかじめの指示通りに母親が恐怖を顔に表せば、乳児は「断崖」から向きを変えて引き返し、当惑の色を示すでしょう」[Stern, 155]。こうして、乳児は未だ経験したことのない事柄に対しての価値づけを、他者が示す情動的価値を手がかりにして獲得する。他者の意図をその表情によって読みとることで、乳児は、見知らぬ対象や不確実な状況に対する価値づけを学習していくことになるのである。

こうして、他者との間で構築される共通の世界は、しかし、情動的な色彩をなお色濃く帯びたものであり、ひとつの「システム」として他者と共有されるものではないといわなければならない。母親の微笑みによって価値付けられた「視覚的断崖」を安心できる対象と見なし、恐怖によって色づけられた対象に当惑する乳児の世界において、各々の対象は、ある種の客観的視点からいつでも「同じ対象」であることを保証されていない。情動的パターンによって認識される対象は、乳児や近い他者との間での情動的な価値付けの変化に

応じて、その同一性自体を変化させていくものだと考えられるのだ。「視覚的断崖」として示されるものも、まず単に視覚情報だけに基づいて対象の同一性が認識され、その上で情動に基づいた価値付けが付与されるというよりも、むしろ、そのもの自体が「安心できる対象」あるいは「恐怖すべき対象」と見なされていると考えられる。その限りにおいて、認識に伴う情動が、調律の色調に応じて変化する場合には、全く別の「異なる対象」として乳児に現れると考えられるのだ。だとすれば、情動的調律を介して共有される「世界」は、ある客観的な視点から対象を「同じ」とみなす世界のあり方とは、なお決定的に異質なものだといわなければならないだろう。それぞれの個人が、異なるパースペクティブから、それぞれ独立に「同じ物」を価値付けることができるような「システム」は、この段階における乳児にとっては、まだ存在していないと考えられるのである。

実際、この段階で乳児に認識される「他者」は、乳児と完全に独立したパースペクティブをもったものと見なされているわけではないと考えられる。実際確かに、他者と情動的価値を共有する世界において、乳児は、自己だけが世界の中心として存在していると思っているわけではなく、他者の存在を理解しているといえる。他者もまた、一定の意図をもって世界を別様に認識していることを了解できなければ、他者の指し示す情動的価値を読みとることもできないはずである。他者との間で共有される世界において、乳児の「自己」は、すでに、世界の価値づけを行うのは「自己」だけという独我論的な立場から離れ、情動的に価値付けられた世界を他者と分かち合っているといえるのである。

しかしながら、そうした情動的世界に見出される「他者」は、情動調律が行われる場面を離れて、独立した「内面性」をもつ存在とは見なされていないと考えられる。他者が実際に何を考えているのか、表情やしぐさなどにも現れない他者の「内面」は、乳児が認識する世界には現れていないと考えられるのだ。乳児によって認識される世界の中で、他者がはっきりと自己と区別されて現れる

のは、情動的なコミュニケーションの中で何らかの「意図」が表出する限りにおいてのことであり、そうした情動の表出を離れて、常に隠された「内面」をもって独立している存在とは見なされていないと考えられるのである。

二、言語獲得の過程での情動的同一性の世界の変化

さて、しかし、幼児にとってのこうした情動的な世界の表象は、言語を獲得する段階に至って、著しい構造変化を被ることになる。言語獲得にあたって子供は、それまで築き上げてきた、情動的イメージに溢れた世界を離れて、言語的に一般化された世界と関わるようになるのである。それは、スターンがいうように、「私たち (we)」[Stern, 196] の次元に幼児が参入することに他ならない。子どもが近い養育者とのコミュニケーションによって構築してきた情動的意味に満ちた世界が、そこでは、第三者を含めた一般的な秩序によって表象されることになるのだ。

情動性と強く結びついた認識においては、例えば、ある椅子は華やかで暖かく、日の匂いと混合したイメージによって認識され、別な椅子は陰気で寂しく、黴臭く苦いイメージによって認識される。形状という点においては確かに類似を認められたとしても、幼児にとっては時になお、「同じ」というにはあまりにかけ離れた存在に感じられる場合があるわけだ。言語的な体系に従って世界を表象するためには、それゆえ、それぞれの対象の認識から情動を喚起するような特徴を、独立で付帯的な性質として抽象し、対象の「本質」から区別することができなくてはならないだろう。それはまさに、「椅子とは何か」という哲学的な問いを導きとして、対象の「本質」を規定し、偶然的で分離可能な性質を対象から抽出することにほかならない。「椅子」のアイデアと呼ぶべきものを範として、「あの椅子」や「この椅子」が、同じ「椅子」として認識されることになるのだ。そうして、それぞれの性質を独立した要素として抽出し、対象の性質をカテゴリーによって分類するた

めに、幼児は、情動と強く結びついて認識される世界の放棄を要求されることになるのである。

壁に映る黄金色の日差しの斑点をこどもがどう知覚するかを考えてみましょう。乳児は、その斑点の強さ、暖かさ、形、明るさ、喜びなど、斑点の無様式な側面を感じとるでしょう。それが黄金色の光であるという事実は、そのこと自体、本質的なことでもなければ、重要なことでもありません。(Wernerによると) 斑点を見て感じ、知覚している間、子どもはあらゆる無様式特性の混合、つまり、強さ、暖かさなどといった光の斑点のもつ知覚の基本的特性と共鳴する総括的体験をしているのです。斑点に関してこのように柔軟性の高い汎次元の見通しを維持するためには、乳児は、斑点を体験する感覚チャンネルを特徴づける特定の性質(色彩のような二次的、三次的知覚特性)に対して盲目的でなければなりません。子どもがそれを視覚体験であると気づいたり意識してはいけません。ところが、言語はまさに、それを子どもに無理強ひします。[Stern, 204]

子どもにとって、壁に映し出される光の反映は、情動によって価値づけられた世界のひとつの対象であり、様々な感情が混合されたものとして知覚されている。子どもにとっては、それは、あらゆる感覚を総合したかたちで現れる一個の情動的なイメージであり、視覚的情報を知覚される対象から区別する認識とは両立しない。一般性による世界の表象は、しかし、情動的な対象を視覚的な情報に整理して切りつめ、第三者との間の言語的な「意味」の共有に供することを要求する。一般的な表象において光の反映は、特定の価値付けから独立した一個の物理的現象であり、情動と混じり合って認識される対象ではないのである。

情動調律などによる他者とのコミュニケーションによって、一定程度の複雑さと安定した構造をもつに至った、それまでの情動の世界に慣れ親しんでいた幼児にとって、一般性による体系的な世界の認識の要求は、ある種の調停不可能なもの

調停を課すことになるといえるだろう。「食べる」という動詞だけを獲得している幼児が、「何」を食べたいかを母親に言語的に示せず、フラストレーションをためる例は、一般的な世界の表象に対する幼児の戸惑い的一种だといえる。子供はそこで、「何」を食べたいのか、情動的イメージとしてはっきり意識していながら、その情動的イメージを介して母親に意志の伝達をすることができず、なぜ母親は理解しないのか、と痲癩を起こすのである。スターンがいうように、ここで、「食べる！」とだけ叫び続けて、何が食べたいのかわからず戸惑う母親を前に不満を表す幼児は、幼いために親の全能性を誤って信じているのでは決してない[cf. Stern, 205-6]。「何」を食べるのかを示さないまま「食べる！」とだけ繰り返す、その伝達可能性を頭から信じているように振る舞う幼児の行動は、親の全能性をあてにした甘えの混じった欲求不満を表明するものでは決してなく、情動的な世界の認識として母親と共有されていたはずの対象が、そこで伝達の危機に直面し、そのことにいいようのないもどかしさを感じていることの現れだと考える必要があるのである。

情動的価値を色濃くもった世界の認識から、言語によって一般化された世界へと移行するに際して、幼児は、また、このような情動の対象の一般的表象をめぐる困難に直面するのと同時に、「自己」をめぐる新たな問題に出会うことになるだろう。というのも、世界に存在する対象から情動的色彩が抜きとられ、様々な物の一般的な存在の規定が示されると同時に、「自己」という存在が、その一般的世界においてどのような位置をもちうるものかという問いが顕在化してくるからだ。自己の発動感や運動のまとまり、あるいは、情動的に同調する他者との間の区別なき区別として意識されていた、それまでの「自己」は、そこではじめて、一般的な視点から表象される世界の中での「自己」の位置を問われることになる。それぞれの対象を一般的な体系の中に位置づける作業がはじまるにつれて、幼児自身の「自己」がその体系のどこに位置づくものなのかという問題が、にわかには顕在化してくるのである。

実際、スターンがいうように、言語獲得時期の幼児には、「遅延模倣 (deferred imitation)」と呼ばれる顕著な特徴をもった行動が現れる。例えば、スターンが例示する生後 18 ヶ月の子どもは、「自分が今までにしたことがない行動 — 電話のダイヤルを回す、哺乳ビンで人形にミルクを飲ませる、カップにミルクを注ぐ — を誰かがしているのを見ると、その日、後になって、あるいは数日経ってからダイヤルを回したり、ミルクをあげたり、注いだりするのを真似たりする」[Stern, 189]。このような、大人の動作を真似るという、あどけない幼児の行為には、しかし、発達過程において、それまでは見られなかった、いくつもの重要な要素が含まれているといわなければならない。すなわち、為された行為を単純にその場で模倣する場合とは異なり、遅延模倣において幼児は、1、身体的行為を正確に表象し蓄えるために、視覚的イメージや言語などの一般的な形式を獲得し、2、それを長期記憶として保存した上で自らこれを喚起できることに加えて、3、他者によってなされる行為の表象と自らがなす行為（前者においては認識が問題になり、後者においては運動が問題となる）の区別と一致を理解し、最後に最も重要な点であるが、4、自分をモデルと同じ状況にあるものとして、自分自身を客観的に捉える、といったことが必要となる [cf. Stern, 190f.]。つまり、この時期の幼児は、他者の行為を一般的な体系のうちに位置づけて理解し、記憶においてそれを再現すると同時に、自らがその行為主体となり、他者がなした行為の一般的な体系における位置づけを自らのものとしようとしているのである。単に他者の行為を一般的な形式のもとに認識するだけでなく、その行為を自ら演じてみせることで、幼児は、一般的な体系における「自己」の地位を構築しようとする。鏡に映った自分の像に関心を寄せはじめる [cf. Stern, 191] この時期、幼児は、体系的な表象の世界の内部での自分の位置づけがどのようなものであるかを探求しはじめていると考えられるのである。

芸術における情動的同一性

ところで、スターンが指摘するように、「芸術」と呼ばれる我々の営みは、こうした情動的同一性によって彩られた世界の経験を考えることから理解される。情動的な色彩によって世界を彩る対象の認識が、言語を獲得した後、一般性とは異なる仕方でも世界を表象しようとする試みの一つのよりどころとなっていると考えることができるのである。

赤児の皮膚のようにみずみずしく、フルートのように甘美で、草のように青々とした匂いがある。そして、腐敗し、ぜいたくで、勝ち誇った匂いもある。(Baudelaire, *Correspondences*, 1857) [cf. Stern, 181]

ボードレールによって示される、触覚、聴覚、嗅覚の差異をすべて混合して表現されるような、こうしたイメージは、「無様式的な知覚」として情動的に表象された乳児期の世界の経験と深く通底するものと考えられる。「フルートのように甘美な匂い」という表現は、聴覚的な情報としてのフルートの音を、嗅覚によって表象されるものを表現するための単なる比喩的な手段と考えることはできない。ここでは、カテゴリーの異なる二つのもが単に偶然的に並べられて、その「文飾」的な効果がねらわれているというよりもむしろ、決定的に異なるはずの二つのもの間にある必然的な関係が、こうした表現を呼び込んでいると考えられるのである。「匂い」と呼ばれるものは、嗅覚器官によって獲得された何らかの経験を指し示すものではなく、ひとつの情動的イメージとして、様々な感覚と結びついた特有の経験を指し示していると考えられるのだ。触覚と聴覚と嗅覚の分類を「総合」した、ある「無様式的な知覚」の経験が、こうした文学表現の「必然性」⁽³⁾を基礎づけていると考えられるのである。

言語獲得以後、背景に退けられる情動的世界の経験が、なお何らかの仕方でも我々の認識に作用し、一般的な世界の認識とは異なる枠組みで情動を揺

さぶる。「身体論」と呼ばれる分野で問題とされる事柄が、こうした情動的同一性の認識とどのように関わることになるのか。その広い問題の射程が明らかになったところで、ひとまず本論を閉じることにしたい。

[Hume] David Hume, *A Treatise of Human Nature*, edited by David Fate Norton and Mary J. Norton, Oxford University Press, 2000

[Merleau-Ponty] M. Merleau-Ponty, *Les relations avec l'autrui chez l'enfant*, Centre de Documentation Universitaire, 1951

[Proust] M. Proust, *À la recherche du temps perdu*, Folio-Gallimard, 1987

[Stern] D・N・スターン著、小此木啓吾他訳『乳児の対人関係』岩崎学術出版社、一九八九

《註》

(1) [cf. Merleau-Ponty]

(2) 近年、現象学の分野で盛んに研究されている「間志向性」の問題は、幼児によってこの時期に獲得される能力を巡って展開される。フッサールの現象学においては、通常、意識主体自身の志向

性のみが論じられ、他我をどのように位置づけるかということが問題とされる。志向性の共有という問題は、それゆえ、現象学において、他者との関係がどのように成立しているかを考える上で重要な論点を提出すると考えられているのである。

(3) 例えば、ブルーストは、そうした芸術表現の必然性について、次のように語っている。

ひとは、一つの描写の中で、描写される場所に存在する対象を、無限に継起させることができる。しかし、真実が始まるのは、作家が二つの異なる対象を取り上げ、その二者の関連を措定しその関連は、科学の世界における因果律という唯一の関連の、芸術の世界における類似物である¹⁾、それらを美しい文体の必然的環 (les anneaux nécessaires) の中に封じ込める瞬間でしかないだろう。つまり、人生と同様、作家が、二つの感覚に共通な特質を比較し、それらの感覚を時の偶然性から解放するために、一つの隠喩の中に結合することによって、それらの共通の本質を引き出すときである [Proust, 889]。

「文体の必然的環」によって世界の対象の関係を描ききることは、科学の世界における因果律と同様に、ある種の真理を示すとブルーストはいうのである。